



を 読 む

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽健夫

韓 国にも中国にも、日本の大学入試センター試験にあたる国家統一試験がある。約10年前に河合塾ではそれらを翻訳してみた。そのときにあっと思ったのは、中国、韓国いずれの国でも、歴史の問題で日本の倒幕、明治維新が扱われていたことである。例えば中国の4択問題、

- A. 商人、資本家、新興地主が指導的な役割を演じた。
- B. 中級・下級武士が積極的に戦いに加わった。
- C. 明治政府は一連の資本家階級的な改革を行った。
- D. 鳥羽・伏見の戦いを通して幕府軍は一掃された。

日 本の幕末から明治に至る歴史の流れは、日本だけではなく特に近代化を目指している国にとって大変重要視せねばならない歴史過程であるのだな、ということ再認識させられた次第である。

そ の倒幕から明治政府の誕生までの苦しみと、その後の近代国家の基盤の確立に至るまでの疾風

怒濤の経過を、1862年（文久2年）に英国公使館付の通訳生として19歳で来日し、1882年（明治15年）に離日するまで約20年間、まさに渦中であってつぶさに実見したのがアーネスト・サトウである。そのサトウの日記を縦軸にして書かれたのが、本書『遠い崖』である。

遠 い崖—アーネスト・サトウ日記抄1『旅立ち』は、英国公使館焼き討ち事件など、攘夷の嵐の吹きまくる横浜にサトウが到着し、その直後の6日目に生麦事件が起こる。そして英国人リチャードソンの殺害されたこの事件をめぐるの、英国公使と幕府との政治的やりとりなどが、生き生きと描写される。さらに事件の張本人である薩摩藩への英国艦隊による鹿児島攻撃の様子が第2巻『薩英戦争』で活写される。第2巻ではまた長州藩による下関海峡を通過する外国船に対する攘夷砲撃に対応すべく、四国艦隊による下関攻撃をめぐる政治的やりとり、実戦の様子が述べられている。えっ、そうだったの、と浅学の筆者には新

鮮な事実が次々に登場する。

こ の本の重要な読みどころは、少し長い序章に入る前の序章である。その中で著者萩原延壽自身が語っているように、ロンドンの国立公文書館でサトウ文書や外務省年鑑、外交記録、そして当然のことながら日本のこれまでの記録資料の類を突に丁寧に渉猟して、事実を積み上げていることだ。そして資料入手の圧巻は、サトウと同じ時期に英国公使館付医官として来日した、サトウの親友ウィリアム・ウイリスが、本国の長兄にあてた200通近い手紙を手に入れていることだ。この手紙は著者がウィリアム・ウイリスの甥の娘から贈られるのだが、そのストーリーが実に美しく、また著者の事実を収集するあくなき執念が知らされる。その執念が読み手を歴史のその瞬間に引きずり込む。凄みのある快著である。

な お、本書の続巻は「慶喜登場」「大政奉還」「江戸開城」「岩倉使節団」「西南戦争」など14巻まで今後出版される予定とのこと。



萩原延壽著
『旅立ち 遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄1』
朝日文庫 定価（本体760円＋税）
『薩英戦争 遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄2』
朝日文庫 定価（本体900円＋税）